

資料

ブリティッシュコロンビア州の 中等学校カリキュラム改革における家庭科

渡瀬典子

岩手大学 教育学部

Key words: 卒業ポートフォリオ, ブリティッシュコロンビア州, IRP(Integrated Resource Packages)

日本家庭科教育学会誌, 52(3): 195-202, 2009

1 はじめに

「(学校) 教育を通して児童・生徒にどのような力を育成するか」は、多様化する現代社会において極めて重要な命題である。文部科学省の提唱する「生きる力」、OECDのDeSeCoプロジェクトによる「キー・コンピテンシー」(“人生の成功と適切に機能する社会”のために資する能力)¹⁾、「ポスト近代型能力」²⁾等、育成する能力の具体化について近年様々な論議が重ねられている。同時に、これらの能力育成に対応するカリキュラム開発は喫緊の課題といえる。そのうえ、欧米諸国では大都市において様々な文化を背景に持つ移民の増加が顕著であり、個人・家庭・学校だけでなく、社会の一員として必要なスキルを身に付けた青少年の育成は重要課題ともいえる。

カナダのブリティッシュコロンビア州(以下、BC州と記す)もこれらの教育課題を持つ地域の一つである。同教育省は2002年から2年間に渡り、教員、生徒、親、中等後教育^{注1)}機関の代表者、産業界、地域住民等の数千人を対象に、生徒が「中等学校を卒業するまでに(社会の一員として)身に付けてほしい力」について協議した。その結果、①キャリア開発面、②知的発達面(問題

解決、意思決定のためにアカデミックスキルを利用できる)、③人間性・社会性の発達面(自分・他者のQOL向上のためにイニシアティブをとり、地域社会に寄与する態度・能力)の育成という観点が抽出された。そこで、同教育省は従来型のペーパーテストによる州統一試験だけでなく、生徒の実際の生活の中で活用可能なパフォーマンス能力の評価を取り入れた教育改革に取り組むことになった。

カナダは州単位で教育行政が行われ、BC州の場合、初等教育7年、中等教育5年の7-5制を採用している³⁾。BC州教育省は先に挙げた「中等学校卒業までに身に付けてほしい力」を視座に入れた卒業プログラムの改訂(期間が11、12年生の2年間から10-12年生の3年間に、必修教科・科目の変化)を2004年9月から適用した(表1)。そして、最も大きな卒業プログラムの変化は、10-12年生で「卒業ポートフォリオ(Graduation Portfolio)」4単位を卒業要件に課したことである。「卒業ポートフォリオ」では、生徒のキャリア形成や自己課題に取り組む実践的な学びが重視され、州統一試験対象教科ではない家庭科の役割も組み込まれた。

ここで、BC州の中等学校カリキュラムにおける家庭科の位置づけに言及する。家庭科(Home Economics Education)は表1にある「応用技能(Applied Skills)」という教科群(家庭科のほか

(受付日 2008年3月28日/受理日 2009年6月6日)

Noriko WATASE

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-33

に、商業、情報、技術教育)の一つである⁴⁾。現行カリキュラムでは「応用技能」もしくは「芸術」の科目群から4単位選択必修のため、BC州の生徒全員が家庭科を学ぶわけではないが、各学校で複数の科目が開講されている。また、BC州では州が認可している科目についてIntegrated Resource Packages (以下IRPと記す)というカリキュラム指標を持ち、家庭科では2008年度9月施行の「食物と栄養8-12」、「テキスタイル8-12」、「家族学10-12」等がある。

本報告は、実社会で必要とされるスキル育成を軸としたBC州の後期中等学校カリキュラム改革に注目し、家庭科関連科目の状況と「卒業プログラム」改訂に伴うIRP家庭科の改訂の特徴を明らかにする。同時に、BC州の教育改革から日本の教育に対して得られる示唆について検討する。

II. 研究方法

前項で挙げた事柄を明らかにするために、BC

州の卒業プログラムに関する「Graduation Portfolio Assessment and Focus Areas: A Program Guide(2004)」,「Program Guide for Graduation Transitions (2008)」, 家庭科のIRP等のBC州教育省文書による文献調査と、著者が2005年3～8月にBC州に滞在した際に行ったインタビュー等を考察の補足とする。

III. 結果と考察

1. BC州の中等学校卒業要件の変化

2004年9月入学者から改訂となったBC州の中等学校の卒業プログラムは「アカデミックな能力をもち、実際の世の中で競争でき (compete)、生涯学習者で社会的責任感のある市民の育成支援」をねらいとしている⁵⁾。

必修の「卒業ポートフォリオ」は、6つの領域(美術・デザイン、コミュニティへの参加と責任、教育・キャリア計画、雇用適正能力、情報工学、健康管理)を設け、実際に生徒が地域社会で様々

表1 後期中等学校における「卒業プログラム」(必要取得単位)

(1995～2003年)			11-12年生用			(2004年)			11-12年生用		
科目名			最低必要 単位数			科目名			最低必要 単位数		
必修 教科 28 単位	言語科目11		4	→	必修 教科 48 単位	言語科目10		4			
	言語科目12		4			言語科目11		4			
	数学11もしくは12		4			数学10		4			
	応用技能11		2			数学11もしくは12		4			
	美術11		2			美術10と (もしくは)		4			
	社会11もしくは12		4			応用技能10, 11, 12					
	BC先住民学11		4			社会10		4			
	科学11もしくは12					社会11もしくは12		4			
	キャリアと生活設計11		2			科学10		4			
	キャリアと生活設計12		2			科学11もしくは12		4			
選択教科・科目			4	→		体育10		4			
						プランニング10		4			
						選択教科・科目		28			
合 計			52			卒業ポートフォリオ注1)		4			
						合 計		80			

注1) 「卒業への移行」という名称に2008年から変更

(Graduation Portfolio Assessment and Focus Areas; A Program Guide, 2004より著者作成)

な実践活動を経た後、まとめ、発表する学習活動である。この「卒業ポートフォリオ」は、中学校卒業の「エビデンス（調べ発表、創作活動といった学習活動の足跡）」としての役割以外に、中等後教育の奨学金申請資料、就職の面接等での利用、さらには生涯に渡る実践の深化・継続を目指す。

表2は、2004年改訂の卒業プログラムにおける「卒業ポートフォリオ」の構造である。「ポートフォリオの中核」（＝側面1）は全領域必修で、「側面2」以降は6つの領域の中から自身の関心に合わせて1領域（場合によっては複数領域）選択し、各自が具体的な課題を追究する。「卒業ポートフォリオ」の評価は項目ごとに行動目標が設けられ、得点化される。「プランニング10」という授業では、「卒業ポートフォリオ」作成支援のための時間が確保され^{注2)}、この授業をとおして、「卒業ポートフォリオ」作成が学校・家庭・地域で取り組んだ実践活動の蓄積だと生徒に認識させる。最終学年の12年生では、生徒の発表内容に応じて、イベントの開催、発表、パフォーマンス等による最終プレゼンテーションを実施するはこびとなる。

「卒業ポートフォリオ」作成には、「プランニング10」のほかに、開講教科・科目全体で生徒が自発的に「エビデンス」を集め、学びを深めるプロセスが重視される。表3は卒業プログラムガイド

で「卒業ポートフォリオ」のエビデンス収集に寄与する科目として紹介された家庭科関連科目の一覧である⁶⁾。「家庭科関連科目」としたのは、「IRP 家庭科」の中で挙げられない科目群のうち、各学校で家庭科のコースに置かれているもの、家庭科教員が担当している科目を含むからである。

濃い網掛け部分は家庭科関連科目がある項目で、とくに「美術・デザイン」「健康管理」の領域で科目名が数多く挙がっている。例えば、「美術・デザイン」領域では調理、被服製作等で作品の創作・評価を審美的に学び、絵画・戯曲の作品鑑賞・解釈をもとに家族／人間関係について考えることができる。また、「情報工学」ではCADによるデザインや、アパレルの商品管理等でコンピュータ技術の活用が想定できる。

薄い網掛け部分は「プランニング10」を含む項目である。「プランニング10」は家庭科がある「応用技能」とは別の教科群「健康とキャリア教育」に置かれているが、その内容は「卒業ポートフォリオ」作成支援以外に健康教育、生活設計も含むので、日本の家庭科教育がカバーする内容と大いに重なる。よって、日本の家庭科教育の学習内容で見ると、家庭科と「卒業ポートフォリオ」の間わりはさらに拡大するかもしれないが、現状のB・C州の家庭科でも表3に表れるように「卒業ポートフォリオ」作成に貢献可能な科目が多くある。

表2 「卒業ポートフォリオ」の構造

ポートフォリオの領域	ポートフォリオの中核		ポートフォリオの選択			
	側面1	側面2	側面3	側面4	側面5	
1 美術・デザイン	アート・パフォーマンス・デザイン作品に感応する	オリジナル作品を創作し、演じ、デザインする	アート・パフォーマンス・デザイン作品の構成（要素、原則、材料、過程、スキル）を分析する	アート・パフォーマンス・デザイン作品の文化的、歴史的、社会的背景を認識する	—	
2 コミュニティへの参加と責任	サービス活動に協力的かつ敬意をもって参加する	積極的な対人コミュニケーションのスキルを示す	人権（擁護）に応える	多様性の尊重を促す	—	
3 教育・キャリア計画	“卒業への移行計画”をやり遂げる	教育、キャリア、生活に関する情報を調べる	移転可能な教育的スキルを認識し実践する	集中的かつ継続的な学習に取り組む	—	
4 雇用適正能力	勤労・ボランティア体験を30時間やり遂げる	基本的なスキルを実行し試みる	個人のマネジメントスキルを行動で示す	チームワークのスキルを行動で示す	—	
5 情報工学	IT技術を利用する	情報を調べるためにインターネットを使う	情報管理のためにITを用いる	情報を紹介するためにITを用いる	—	
6 健康管理	中度～強度の身体運動80時間をやり遂げる	「ポートフォリオの中核」で示された必修80時間より多くの時間、運動する	身体的ウェルビーイングと健康的な食事を結びつける	情緒的ウェルビーイングと身体の健康とを関連づける	健康向上のための意思決定をする	

(Graduation Portfolio Assessment and Focus Areas: A Program Guide, 2004より著者作成)

2. IRP家庭科の改訂の特徴と卒業プログラム

(1) IRPとは

IRPは、3つの学習原則（①学習には生徒の積極的な参加が必要である、②生徒は多様な方法、様々な進度で学習をする、③学習には、個人と集団両方のプロセスがある）に則って開発されたカリキュラム指標である。現行のIRPは、「予想される学習成果」に対応する「指導戦略例」、「評価戦略例」、「推薦学習資料」で構成されている。

2002年に実施されたBC州教育省調査（N＝2,954）でのIRPの活用状況を見ると、半数強の教員が「ときどき」「通常」利用すると回答し、初任者が最もIRPを活用する機会が多かった⁷⁾。また、「予想される学習成果」が最も利用され、実用性があると評価されていた。しかし、同州の教育法で「IRPを基盤としたカリキュラム構築」が推奨されているが、IRPは日本の学習指導要領に比べて拘束力が弱く、実際の利用は教員裁量に任されている。事実、筆者がBC州の家庭科教員、教育実習生にIRPの運用状況を尋ねたところ、「IRP導入以前の授業内容と現在もあまり違いがない学校もある」、「IRPの存在を知らない教員もいる」という回答もあった。また、開講科目が学校ごとに異なることから、IRPも多様な履修形態

や卒業プログラム改訂への対応を要していた。

(2) バンクーバー市の家庭科開講状況と改訂「IRP家庭科」

IRPは日本の学習指導要領のように学校段階ごとの改訂ではなく、教科・科目ごとに随時改訂が行われる。「IRP家庭科」は卒業プログラムの改訂に伴い、2004年に「家庭科8－10」の補足版を出している。ここでは、10年生の家庭科の「予想される学習成果」について「計画と問題解決」、「背景」、「技術的能力」の観点で補足され、「卒業ポートフォリオ」支援の方向が示されたといえる。そして、2007年には新たに家庭科カリキュラムを再構成したIRP改訂版が発表された（2008年9月施行）。この改訂では①2004年のIRP補足版から一歩進めた「卒業ポートフォリオ」導入への対応、②実際の科目開講状況を反映したカリキュラムの再構成、③各学年のつながり、学習プロセスの重視、が見てとれる。そこで、②に挙げた実際の開講状況について、BC州の人口集中地域であるバンクーバー市の状況を例にとる。バンクーバー市には全日制の中等学校が全部で18校あるが、そのうち家庭科関連科目があるのは15校である。表4は、2006／07年度に15校で開講された家庭科科目の一覧である。表頭に挙げた科目名は、各

表3 「卒業ポートフォリオ」に対応する科目例

ポートフォリオの領域	ポートフォリオの中核		ポートフォリオの選択		
	側面1	側面2	側面3	側面4	側面5
1 美術・デザイン	家庭科10、食物学11、被服学11／12、家族学12（4／16科目）	家庭科10、食物学11、被服学11／12、家族学12（4／19科目）	家庭科10、食物学11、被服学11／12、家族学12（4／20科目）	家庭科10、食物学11、被服学11／12、家族学12（4／24科目）	—
2 コミュニティへの参加と責任	全科目で	プランニング10と全科目で	プランニング10など	プランニング10など	—
3 教育・キャリア計画	プランニング10と全科目で	プランニング10	プランニング10と全科目で	プランニング10と全科目で	—
4 雇用適正能力	プランニング10と全科目で	プランニング10、家族学11（1／10科目）全ての科目で	プランニング10と全科目で	プランニング10と全科目で	—
5 情報工学	被服学12（1／29科目）	プランニング10と全ての科目で	（0／7科目）全ての科目で	（0／4科目）全ての科目で	—
6 健康管理	家庭科該当科目なし（0／2科目）	家庭科該当科目なし（0／2科目）	プランニング10、食物学10／11／12、カフェテリアトレーニング11／12、家族学10／11／12（3／6科目）	プランニング10、家族学10／11／12、ヒューマンサービス11／12（2／3科目）	プランニング10、家族学10／11／12、食物学10／11／12（2／3科目）

注）表中の（ ）は、「卒業ポートフォリオ」ガイドに掲載された（家庭科関連科目数／全科目数）

（Graduation Portfolio Assessment and Focus Areas: A Program Guide, 2004より著作権作）

学校の区分にならった。「応用技能8」は8年生用の科目で、家庭科教育と商業、情報、技術教育の基礎的内容が立てられている。「食物学」「カフェテリアトレーニング」「被服学」「家族学」は98年改訂のIRPに示された科目である。「心理学」はIRPの中で「家族学」に含まれるが、「家族学」とは別立てで「心理学」の枠組みを設ける学校が多かったため、表4のようにまとめた。「観光学」はIRP家庭科にはなく、「職場体験プログラム」のカテゴリーにあるが、実際に科目を担当しているのは家庭科教員が中心である。また、「キャリア準備科目」も「職場体験プログラム」だが、家庭科科目として各学校のカリキュラムに紹介されていたものは全て取り上げた。

表中の◎は対象学年で複数科目設置、○は1科目設置を意味する。また、対象学年をとくに明示していないものについては、履修可能と思われる学年を推定して示した。表4から家庭科関連科目を置く学校の特徴は、a. 複数科目を設置する学校が多い b. 全体的に後期中等学校段階での科目設定が多い c. 「食物学」「被服学」の科目設定が多く、学年をまたぐ科目が多い d. 「家族学」「心理学」の開講は11、12年生が中心、といえる。

例えば、F校では「被服学」の関連科目が8科

目、C校では6科目が置かれている。「その他」の科目では、A、F校で「卒業ポートフォリオ」での体験活動を視野に入れ、ティーチングアシスタントを生徒が担当する科目が置かれたり、「キャリア準備科目」として、職業体験を含む「カフェテリア／調理トレーニング」「ヒューマンサービス」「理美容」等を設置したりする学校があった。

図1はIRP家庭科の枠組みを98年改訂と07年改訂で比較したものである。07年改訂では、98年改訂の「家庭科8-10」「家庭科11,12」というまとまりを解体し、学習領域ごとに再編、「家族学」を後期中等学校段階のみに設置、「家族学」を6つのモジュールに分けて再構成し、生徒・教員の関心等に基づく選択制に、「食物と栄養8-12」と「テキスタイル8-12」は学年ごとに内容を積み重ねて学ぶカリキュラムへ、「住居と生活環境」を「家族学10-12」に導入、等の変化が見られる。

図1の破線で囲んだ各科目の内容を見ると、人間の心身の発達に関する内容が厚くなり、とくに「心理」に関する内容は日本の家庭科よりも大きく扱われているのが特徴的である。キャリアに関する内容は「卒業ポートフォリオ」との関係から、各科目の内容に関連する職業について調べ、体験する「職業体験」の機会が設けられた。

表4 バンクーバー市の中等学校で開講されている家庭科科目の状況 (2006/07年度)

科目・領域 学年	「Home Economics」のIRPに含まれる科目																職場体験プログラム				その他				
	応用技能		食物学			カフェテリアトレーニング				被服学				家族学				心理学				観光学		キャリア準備	
	8	9	10	11	12	9	10	11	12	9	10	11	12	9	10	11	12	9	10	11		12	11	12	科目
A 校	○		○	○	◎			◎	◎		○	○	○									○	○	◎	◎
B 校	○		○	○	○*						○*	◎*	◎*								◎	○			
C 校	○	◎**	◎**	◎	◎					○	◎	◎	◎								◎	○			◎
D 校			○	○	○			◎	◎		◎	◎	○				○					○	○		◎
E 校	○		○	○	○			◎	◎		○	◎	◎								○	○	○	○	◎
F 校	○	○	○	○*	○*	○*	○*	◎*	◎*		◎	◎	◎				○				◎**				◎
G 校			○	○	○			◎	◎		○	○	○				○	○			○	○	○	○	
H 校	○		○	◎	○						○	◎	◎								○	○	○	◎	
I 校	○		○	◎	○						○	○	○				○	○							
J 校	○		○	○	○					○	○	○	○												○
K 校	○	○	○	○	○					○	○	○	○								○	○			
L 校	○		○	◎	○						○	◎	◎								○	○	○	○	
M 校			○	○	○			◎	◎			◎	◎									◎	○	○	◎
N 校	○		○	○	○						○	○	○												
O 校	○		○	○	○			◎	◎		○	◎	◎										◎	◎	◎

◎：対象学年での開講科目が2科目以上、○：1科目開講 (バンクーバー市教育委員会及び各中等学校ホームページより著者作成)

注) *1：履修学年がとくに明示されていない科目で、履修可能と思われる学年

*2：「プランニング10」との相互乗り入れ科目

改訂IRPの構成は、より簡潔に書かれた「予想される学習成果」、「到達指標例」、「主要要素の解説」、「授業アセスメントモデル」に再編され、以前よりも各学年のつながり、学習のプロセス重視が明確化した。「予想される学習成果」は各科目の内容それぞれについて必要な知識、技能、態度を定義し、生徒が一連の授業の最後までに何を知り、できるようになればよいか記述されている。「到達指標例」は「予想される学習成果」にある学習目標達成を判断するための評価例、「主要要素の解説」では、教材の幅を広げ、なおかつ学習事

項を深く探求するためのヒントが挙げられている。

以上のようにIRP家庭科は、「卒業ポートフォリオ」の背景にある考え方（BC教育省がまとめた「中等学校を卒業するまでに（社会の一員として）身につけてほしい力」）に倣い、カリキュラム改訂されたが、IRPの利用と同様に「卒業ポートフォリオ」のエビデンス収集を授業に取り入れるか否かも教員に委ねられている。

IV. まとめ

BC州教育省は「中等学校卒業までに（社会の

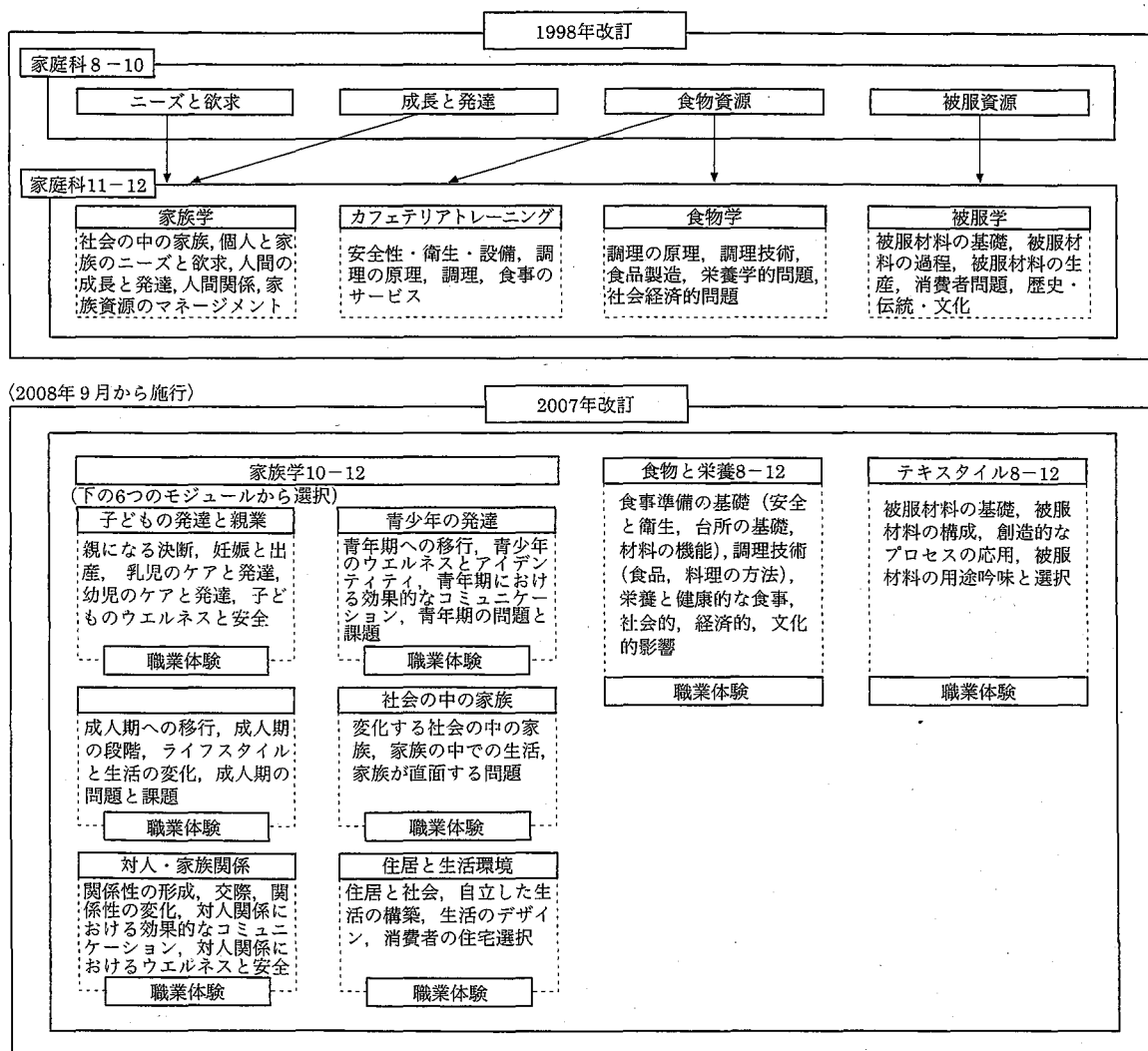


図1 「IRP家庭科」改訂の枠組み

(Home Economics IRP, 1998, 2007より著者作成)

一員として) 身につけてほしい力」育成を実現するべく、キャリア形成を視座に入れた参加型体験学習の累積＝「卒業ポートフォリオ」を含む卒業プログラム導入を実施した。「卒業ポートフォリオ」は①卒業後も生徒が学び続けるための学習スタイルの定着、②教員だけでなく、地域住民の関わりを企図した学習方法の採用、③単年度ではなく3年間にわたる長期のポートフォリオ作成の義務化、が特徴といえる。また、州統一テスト対象教科ではない家庭科はBC州の卒業プログラムの「卒業ポートフォリオ」作成で生徒が収集する「エビデンス」の蓄積に寄与しうることが期待されており、改訂IRP家庭科では実際の開講状況や「卒業ポートフォリオ」に対応する方向で大幅なカリキュラム再編がなされた。

しかし、新しい卒業プログラムで学んだ生徒が最終プレゼンテーションに臨む12年生在学時(2007年2月)、既に「卒業ポートフォリオ」提出を必修としないことがBC州教育相のボンドによって緊急告知された⁸⁾。制度変更の理由は、教育省による学校訪問や視察の際に、州内の生徒、親、教員から「ポートフォリオは複雑すぎる」「生徒がポートフォリオに取り組むのも、教員がそれを評価するのに、時間がとてもかかる」という否定的な意見があがったため、と説明された。そのほか、「卒業ポートフォリオ」では地域社会との結びつきも特徴の一つだったが、都市圏ではコミュニティの流動化が顕著なため、「卒業ポートフォリオ」への地域住民の継続的参画が難航していることが指摘されてきた。この結果、「卒業ポートフォリオ」を大幅に縮小・簡略化した「卒業への移行(Graduation Transitions)」^{注3)}プログラムが必修化され⁹⁾、「卒業ポートフォリオ」は選択実施という扱いに留まった。

いずれにしても、BC州教育省がまとめた“生徒に身につけてほしい力”の多くは、日本における同様の議論の内容とも通底する部分があり、BC州の「卒業ポートフォリオ」全校必修化の試み・失敗ともに学ぶ点は大きい。2002年以降BC州で取り組まれてきた卒業プログラム開発は、①生徒

が「中等学校卒業までに(社会の一員として)身につけてほしい力」という理念の実践化、②日常にある問題を対象とする学びへの試み、③学校を囲むコミュニティの人的資源の活用への挑戦、といった点で評価できる。しかし、カリキュラムの完成年度を迎える前に「卒業ポートフォリオ」を全中等学校で完遂できなかったのは、州土が広大という地理的条件、各校の教育資源差、大幅な卒業プログラムの改編もさることながら、「卒業ポートフォリオ」作成の理念・理解の不徹底という準備不足、パフォーマンス評価項目の設定・評価実施上の課題(煩雑さ、責任主体)が挙げられる。

とはいえ、IRP家庭科は卒業プログラムで重視されたキャリアに関する実践活動に対応し、職業体験機会を明確に設定した改訂カリキュラムに2008年の9月から移行された。よって、今後「卒業ポートフォリオ」が改めて必修化される際には、家庭科が「中等学校卒業までに(社会の一員として)身につけてほしい力」育成に大きく貢献できる教科としての実績が期待できる。しかし、過疎地に勤務する家庭科専任教員の不足、家庭科教員養成システムの課題¹⁰⁾もあり、教員間の人的ネットワークの形成が今後の鍵といえる。そして、「卒業ポートフォリオ」を実施した学校で家庭科がどのように結びついて展開されたかについても今後改めて検討したい。

注

- 1) 大学のほか専門学校、職業訓練校を含む中等学校卒業後の教育機関を指す。
- 2) 10-12年生の3年間(115~120時間程度)を通じて「健康」「教育とキャリア」「ファイナンス」を学ぶほか、卒業プログラムのための時間が10~15%程度充てられている。
- 3) 2008年6月に出された「卒業への移行」プログラムでは、①個人の健康(少なくとも毎週150分以上の中等度の身体運動をする)、②コミュニティとのつながり(勤労体験、コミュニティサービス活動に30時間以上参加)、③キャリアと生活(12年生の最終プレゼンテーションまでに、卒業後の目標、生活設計をたてる)、が必修となった。

引用文献

- 1) ドミニク, S. ライチェン, ローラ, H. サルガニク.
キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして.
東京, 明石書店, 2006, 248 p.
- 2) 本田由紀. 多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・
メリトクラシー化のなかで. 東京, NTT出版, 2005,
286 p.
- 3) 上野顕子. “カナダ—カナダにおける家庭科系教科・
科目の教育課程の現状と動向—”. 家庭科のカリキュ
ラムの改善に関する研究—諸外国の動向—, 国立教
育政策研究所, 2005, p. 19-32
- 4) 片田江綾子, 中山節子, 渡瀬典子. “IV. ブリティッ
シュ・コロンビア州の家庭科カリキュラム”. イギ
リス・アメリカ・カナダの家庭科カリキュラム. 日
本家庭科教育学会 欧米カリキュラム研究会, 2000,
p. 67-74
- 5) BC Ministry of Education. Graduation Portfolio
Assessment and Focus Areas: A Program Guide.
2004, 194p.
- 6) 前掲5)
- 7) BC Ministry of Education. [http://www.bced.gov.
bc.ca/achievement/irpsurvey.pdf](http://www.bced.gov.bc.ca/achievement/irpsurvey.pdf). 2002
- 8) BC Ministry of Education. [http://www.bced.gov.
bc.ca/graduation/portfolio/](http://www.bced.gov.bc.ca/graduation/portfolio/)
- 9) BC Ministry of Education. Program Guide for
Graduation Transitions. 2008, 6p.
- 10) 渡瀬典子. ブリティッシュコロンビア大学における
家庭科教員養成/研修. 東北家庭科教育研究, 第6
号, 2007, p. 27-36

The Reformation of the Secondary School Home Economics Curriculum in British Columbia

Noriko WATASE

Faculty of Education, Iwate University

Abstract

In 2004, the British Columbia Ministry of Education added "Graduation Portfolio" in its graduation program to support "the development of students who are academically competent, able to compete in the real world, and are socially responsible citizens who are lifelong learners." According to the "Graduation Program Guide" published by BC Ministry of Education, home economics education is expected to take a large role in preparing the "Graduation Portfolio." Additionally in 2007, BC's home economics provincial education standards, IRP were revised and reorganized to adapt to the realities of actual courses which have been offered in secondary schools, and to respond to the "Graduation Portfolio(Graduation Transitions)."

Key words: Graduation Portfolio, British Columbia, IRP(Integrated Resource Packages)